

大学英語教育を考える — 運用能力重視の立場から —

高 井 收

1. はじめに

今日、外国語教育は国際化の進展に対応して、コミュニケーション能力の育成が重要視されている。英語教育においても、高等学校の英語の授業科目にオーラル・コミュニケーションが加わり、「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」という目標を掲げている。また、大学においても、道内、外の英語教育に関するアンケート調査結果によると、コミュニケーション能力育成に関わる授業内容のニーズが明らかにされている。オーラル・コミュニケーションの授業を受けてきた学生を如何に評価し、彼らのニーズにあった教育を行なってゆくか。今、試されようとしているのは大学の英語教育である。進みつつあるカリキュラム改革は高校の新課程に対応し、学生のニーズに答えて行くものでなければならない。なお、本稿は平成7年度第10回JACET（大学英語教育学会）北海道支部大会・シンポジウム「大学教育と外国語教育」において発表された内容を加筆修正したものである。

2. 大学における英語教育の目的とは？

およそ大学における英語教育の目的を議論しようとするれば、様々な意見が出て来るであろう。そもそも、大学はその設置基準にもあるように幅広い教養を培う人間教育の一環としての英語教育。また、学部における専門教育の基礎として、文献を読み取る能力の養成。国際社会の中に生きるために必要なコミュニケーション能力の養成などが考えられる。いずれも、それぞれの立場から当然な意見である。これらは一見、個別能力養成のように見えるが、実は、その根幹には、「英語によるコミュニケーション能力の習得を促進する」と言う基本的な真の目的がある。大学教育に携わるものとして、学生達がいずれの専門分野においても、その視野を地球的規模にまで拡大する一助となりたいものである。

3. コミュニケーション能力とは？

さて、それではコミュニケーション能力とはどのような能力をいうのであろうか。古典的な見解では、言語を正しく操る能力、いわゆる文法能力に代表されていたが、新しい要素を付け加えた「コミュニケーション・コンピテンス (Communicative Competence)」という概念が一般的に良く知られている。文法能力に加えて、社会的あるいは、状況に適した表現能力。全体として、テーマに沿ってまとまった内容で表現できる能力。加えて、コミュニケーションがうまく行かなかった場合にも対処できる能力である。これらはコミュニケーション能力が高まるにつれ、互いに影響し合って向上すると言われる。

しかし、英語を日常生活において使用しなければならない環境（例えば、アメリカで語学研修を行う場合など）と、大学など教育機関のほかはほとんど英語を使う機会のない環境とでは、自ずとそのコミュニケーション能力の性質に違いが生じて来る。カミングズ (Cummins 1980) の言葉を借りていうなら、前者が「BICS (対人コミュニケーションに関する基本的な技能)」で、後者が

「CALP (知的・学問的言語能力)」である。我々が日本の高等教育機関において、英語教育を実践して行く場合、目標とするコミュニケーション能力とは学習者の知的レベルに合い、知的興味が保たれたカミンズの言う CALP の修得である。日本語という母語において、学生はある一定の知的レベルに達している。ある者はすでに専門的知識を有していて、それに相応した知識欲が満足されなければ、学習に対するモチベーションが萎えてしまう。学習者の動機付けという問題は、特に大切であり、そういう意味からも、大学に見合った英語教育が望まれる。

4. 第2言語習得理論に基づく英語教育

しかし、最初から高度なレベルの英語表現を学習者に期待してもそれは無理である。やはり、それなりの段階を追って学習されるものであり、彼らの言語能力の成長を見守るようにしたい。そこに、第2言語習得理論に基づく英語教育が考えられる。第2言語習得の研究は過去2, 30年の間に非常に盛んとなってきた。その研究成果によりこれまでに分かってきたことを要約すれば、だいたい次のようなことになる。まず、できるだけ多くの学習者の言語レベルにあったインプットが大切である。それには、言語内と言語外の文脈を駆使した、学習者にとって理解可能なインプットを与えることである (Krashen 1985)。学習者が言語習得に意識的に関わるには、話し手と聞き手の意味交渉によるインタラクションが重要になる (Long 1987)。インプットだけでは不十分であり、むしろ理解可能なアウトプットをさせることが言語習得を可能にする (Swain 1985)。

すなわち、授業の中におけるコミュニケーション能力の育成とは、基本的な日常会話に焦点を置くのではなく、学生の知的レベルにあったトピックをとりあげ、そこに出て来る情報を、適度な速さで吸収し、英語を使って比較的自由に自己表現できる能力を養成することである。

5. 指導法の提案とまとめ

それでは、学習者が自分自身を表現する道具として、英語を積極的に学び、コミュニケーションを取って行くには、いったいどの様に指導して行けばよいのであろうか。それにはまず、明確な目的意識を持たせることであり、身近なところで達成感を持たせるように工夫しなければならない。授業の中でコミュニケーションの機会を与え、「自分の英語が通じた」という喜びを実感させたい。

学習の到達目標として訳ができ、読めるようになったら、それで終わりと言うような誤った考えを持っていないだろうか。日本語に置き換えてもなお、英語を使う力は何もついていないし、対話文が読めても、その様な表現が使えることにはならない。しかし、急に「日本語に訳さず読みなさい。」「英語で自由に話しなさい。」と言っても、空回りするだけで、その手段、方法を習得させてやらねばならない。すなわち、そのためのストラテジーを育てることである。

実際にストラテジーを育てる訓練としては、自然な英語の資料を分析して、自己表現に役立てればよい。その過程手順として、「観察」「分析」「表現」という3段階を踏まえることである。授業では、まず表現方法を意識的に観察させ、マイクロ・スキルに分析させ、それをを用いて自己表現させる。

例えば、リスニングの授業で「スピードが速すぎて聞き取れない」と、よく言われるが、これは、一語一語注意を払い、直訳的に理解しようとして遅れるのではないかと考えられる。必要なのは、適切な意味のかたまり (chunks) に分けながら、頭からどンドン意味を取って行くと言うストラテジーを育てることにある。内容的に重要な chunks の切れ目でテープを止め、今聞いて分

かったこと、そして、次に聞こえて来るのは、どのような内容を期待するかを確認して行く訓練が、効果的であると思われる。

スピーキングにおいては、映画やビデオを用いて登場人物が対話をしている場面を見せ、どの様に受け答えをしているかを観察、分析させ、表現の訓練を通して、いつまでも挨拶のみで終わってしまう会話から脱却した自己表現の方法を身につけて行く方法もある。たとえ、どんなに稚拙であっても、クラス発表などの英語を使った自己表現活動を取り入れることによって、英語はあくまで生きた言葉であることを実感させることが大切であると思われる。

リーディングにしても、演繹法的なアプローチの top-down 方式にしる、帰納法的な bottom-up 方式にしる、先生自らが適切なストラテジーを示し、観察させ、分析させることにより、学習者自らの経験に導くことができると思われる。

ライティングについても、パラグラフの構成は最初にトピックセンテンスが来て、そのみが論じられていると言うことを観察し、分析することによって、学習者自らもパラグラフが書けるようになるのである。このように4技能を更に小さい単位のマイクロ・スキルに分けることによって、観察および、学習が可能となる。適切なストラテジーを身につけ、それによって自分の感情や、考えを表現した英語が通じたときの感動は、学習者にとって、更に次の学習へのモチベーションとなるであろう。

多くの学習者は、英語は他の教科と同じで、一方的に与えられた知識を覚えればよいと考えているようであり、きちんと教科書を使い、授業では先生の話をもじめに聞いていれば、英語ができると信じている者が少なくない。英語に限らず言葉の学習は、基礎的な技能訓練がまず先行する。単純なものから複雑なものへ、コンテキストの多いものから少ないアカデミックなものへと訓練することによって、コミュニケーション能力は育成される。

参考文献

- Cummins, J. 1980. "The Cross-Lingual Dimensions of Language Proficiency: Implications for Bilingual Education and the Optimal Age Issue" *TESOL Quarterly*, 14, 175-188.
- Krashen, S. 1985. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. London: Longman.
- Long, M. 1987. "Native Speaker/Non-Native Speaker Conversation in the Second Language Classroom" In M. Long and J. Richards (eds) *Methodology in TESOL: A Book of Readings*. New York, NY: Newbury House.
- Swain, M. 1985. "Communicative competence: Some roles of Comprehensible input and comprehensible output in its development" In S. Gass and C. Madden (eds) *Input in Second Language Acquisition*. Rowley, Mass.: Newbury House.